令和５年度第１回　福山大学備後圏域経済・文化研究センター　地域資料活用研修

備後偉人シリーズ２「井伏鱒二の出身地・粟根の文化圏―窪田次郎を含む幕末明治期の地域文化活動」

福山大学備後圏域経済・文化研究センター　センター長　青木美保

１，行事の主旨

本研究センターでは、学校での総合学習における地域学習とも関連付けて、備後地域の偉人を取り上げ、地域に伝えられてきた古文書などの資料を通して、地域の歴史・文化に詳しい講師のお話を聞き、若者に伝える講義を実施しています。

令和５年度は２回を予定、第１回目は本学社会連携推進センターで、井伏鱒二生家のある粟根における、幕末明治期の、窪田次郎を含む地域の文化人の暮らしぶりを学びました。

講師は、粟根の旧家のご出身で、昨年度ふくやま文学館に当家に所蔵されていた古文書を寄贈され、それにまつわるご講演もされた世良正文氏（広島大学名誉教授・先端物質科学専攻）で、その古文書から判明した幕末明治期・粟根の文化人の地域活動について、資料の紹介を通してお話を聞きました。

※第２回は本学図書館所蔵の貴重書、中世の「連歌貼付屏風」の紹介です（12 月 23 日実施予定）。

２，行事の概要

日時　2023 年８月 27 日（土）14:00～15:20

場所　学校法人福山大学社会連携推進センター３Ｆ301

対象とする資料

世良家所蔵古文書（書簡、嘆願書、村の日常業務に関する記録類など）

講師　　世良正文氏（広島大学名誉教授））

参加者　　地域に関心を持つ学生、地域の中高校生、その他一般の方 15 名

世良家所蔵の古文書からわかったこと―「粟根文化圏」と「粟根四賢人」の系譜

※今回の講義の要点の第一は、「粟根文化圏」という地域の特徴を、地形、政治・歴史的背景、文化人の系譜、という観点から説明されたことです。

※世良先生独自の調査―「粟根三賢人」を「粟根四賢人」に

今回の講義において力説されたのは、これまでの「粟根三賢人」（窪田次郎・井伏鱒二・藤原武夫）を、新たに藤原禎次郎（武夫の父）を加えて「粟根四賢人」とされたことでした。

世良先生は、井伏鱒二も通った加茂小学校が師範学校出身の教員をそろえていたことを示され、それが藤原禎次郎の尽力によるとされました。

そのような教員構成が加茂小学校に特有のものであることを、福山市内の他の小学校を回って調査された上でのことでした（未調査は数校）。加茂町の文化教育環境に特徴があったことを示す具体的事例の一つかもしれません。

※井伏鱒二の出身地、粟根の文化的先進性

世良先生は、「粟根三賢人」の 3 名が「加茂谷の一番奥、わずか 500 メートルの狭い範囲内」に現れたことに注目され、そこが「粟根文化圏」と呼ぶべき先進的な文化の吸収・発信地となっていたことを指摘されました。そこは「粟根西」と言われる地域で、その起源は粟根夜明け前の、江戸後期に幕府領であったことにあるとのことで、福山領の「粟根東」とは地域の気質に違いがあったとのことです。

そして、その粟根文化の起源には、井原の阪谷朗廬（さかたに ろうろ、1822（文政 5）－ 1881（明治 14））と興譲館の教育活動があること、そして、窪田次郎（1835（天保 6）－1902（明治 35））も阪谷朗廬の教えを受けており、その窪田次郎の下に地域活動を担う粟根の「下部組織」があったとされました。また、興譲館の歴代館長と、粟根の旧家の人々の２～３代にわたる子弟の関係の継続も示されました。

その中に、窪田次郎の「下部組織」の一員・井伏民左衛門（鱒二の祖父）と興譲館で学んだ井伏郁太（井伏の父）の存在もあります。また、井伏の友人、高田類三の父、高田品治も興譲館の出身でした。

世良先生が学恩を受けられた物理学の藤原武夫氏の父・藤原禎次郎氏もそのつながりの中にあること、世良先生のご先祖・世良寛右衛門（天保８生）も、窪田次郎の下部組織の一員であったとのお話でした。

※粟根を取り巻く文化圏

さらに、江戸後期から粟根文化圏には、それを取りまく井原、神辺、福山という三つの文化圏があり、そこに私塾が設立されて、地域の教育を担っていたことが示されました。一番早く成立したのは、神辺の廉塾（一七七五）で、そこで井原の九名村出身者が学び、その都講になった者もいるとのことです。その中の一人、山鳴大年という人物は、阪谷の伯父に当たり、両地域の遠いつながりが思われます。その後、井原には阪谷朗廬が桜渓（さくらたに）塾（一八五一）を開き、さらに興譲館（一八五三）が設立されました。そして、福山には、弘道館、誠之館（一八五四）、江木鰐水の開いた久敬舎（一八五二）が開かれましたが、明治 6 年の学制開始以降、衰退していったということです。

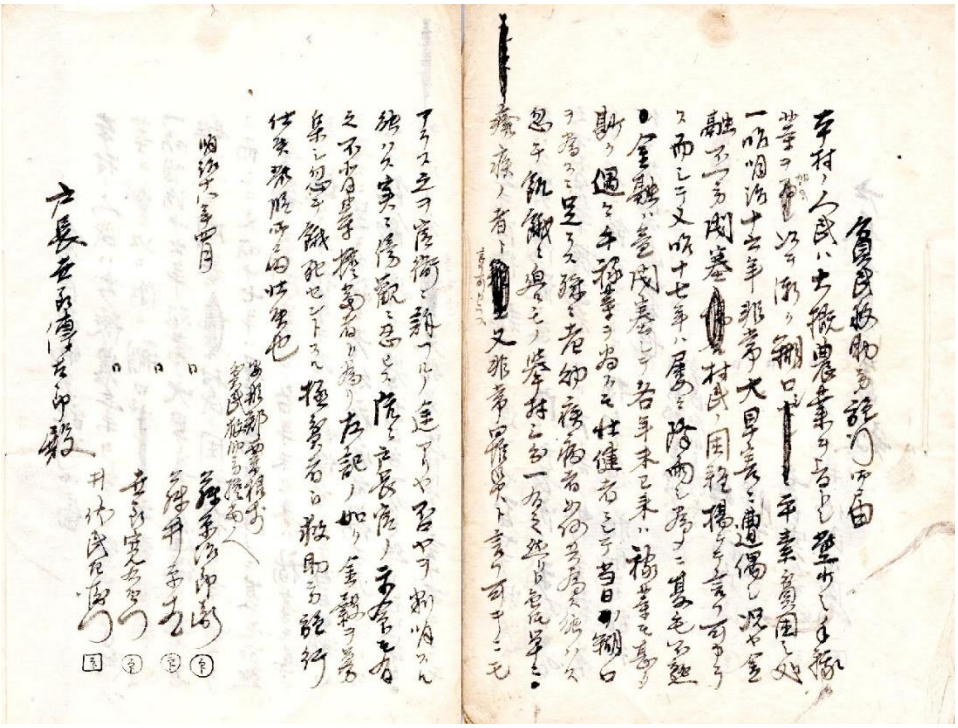
※世良家土蔵の古文書から見る地域活動

世良家の土蔵にあったガラス盤に写された写真。
写っている人物は不明。
右前の人物は、窪田次郎に似ているように思われる。（世良氏談）

①互助活動

村会議が個人宅で開かれ、村で起こる様々な出来事について、話し合い解決策を講じていたことが示されました。その会議は、選挙によって代表者を決めたとのことです（粟根西のみ）。古文書から、その会議で、凶年救済、大雨・台風による河川決壊後の修繕のこと、貧民救済のこと、その他学教資金のこと、村費のことなどが話し合われたことが示されました。その会議は、午後 1 時から 6 時まで続き、当時のゆっくりした時間の流れが感じられるとのお話でした。

また、**博聞会**という勉強会も開かれており、これについては、東西の区別なく 20 数名の人々が集まっていたとのことです。



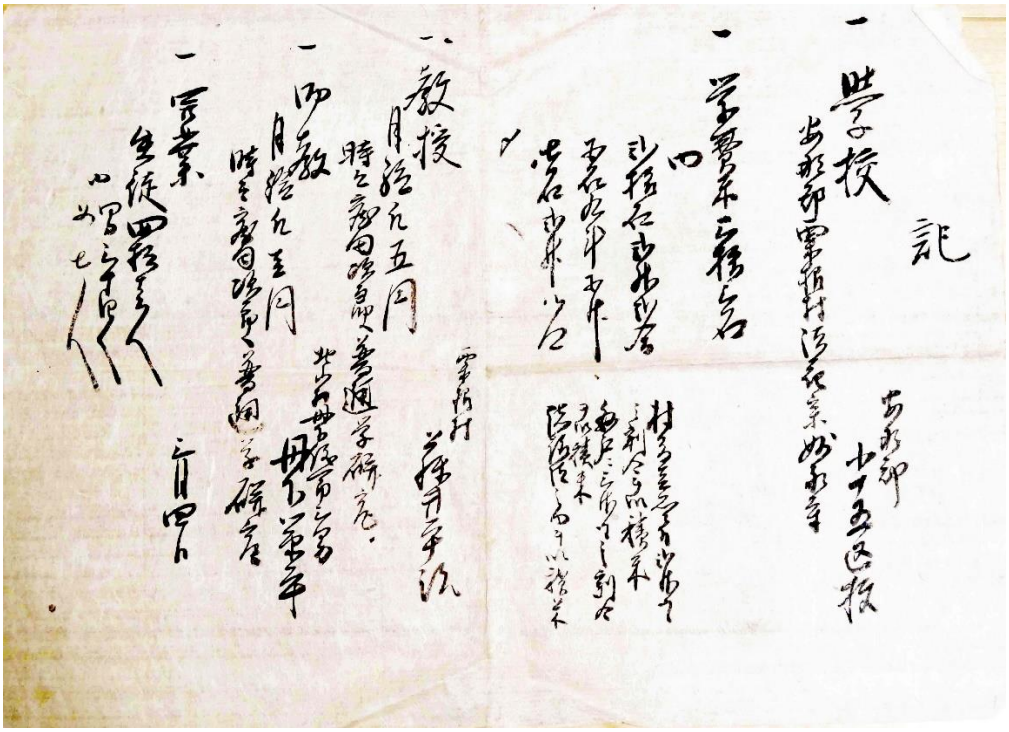
明治 18 年の貧民救済の嘆願書。戸長世良伝太郎に宛てたもので、窪田次郎下部組織の藤井平太、井伏民左衛門、藤原治郎衛、世良寛右衛門によるもの（世良氏談）。

②地域の教育活動

粟根では、窪田次郎の発起によって「啓蒙所」という地域の学校が開かれました。そこで使う教科書を、窪田次郎が主導して種々取り寄せていたことが資料によって示されました。そこには、高度すぎる専門書の類も含ま

れていました。世良先生のご先祖・村太郎が 10 歳の時に、福沢諭吉『世界国尽』を写本した資料も示され、当時の学びの内容を知ることが出来ました。また、村太郎の小学校終了証書が数種あり、県によって等級に違いがあることも示され、明治初期学校制度が始まった直後の混乱の状況が想像できました。

特に、興味深かったのは、窪田次郎が構想していた啓蒙所の制度と、明治初期の学校制度の類似点を示す資料が示されたことで、窪田が当時の政府役人に提案した資料がその後の学校制度に取り入れられたということの、資料的な裏付けの一つかと思われました。



「安那郡小学区校」として、妙永寺が当てられたものか。
「教授」として藤井平次（時々窪田次郎）月給 5 円、「助教」として丹下策平月給 3 円、生徒数 40（男 33、女 7）などの記載。
藤井平太、丹下静一、丹下策平は明治 7 年の興譲館での小学校教員養成講習会に参加している（『興譲館 120 年史』。世良氏談）。

さて、先生の今回のお話は、前年にふくやま文学館でなされた講演を訂正され、「粟根三賢人」（井伏鱒二、窪田次郎、藤原武夫）ではなく、「粟根四賢人」（窪田次郎、藤原禎次郎、藤原武夫、井伏鱒二）を提示されるところに結論があったのですが、それとは別に、粟根文化圏の特徴が、来歴から始まって多角的に語られたことによって、かなり明確になったことに感銘を受けました。

11 月には、ゼミのフィールドワークで興譲館にまつわる史跡をめぐり、粟根文化圏の起源にある人脈を追及します。その前の講義として、有意義な内容でした。

※受講者の感想

地域の方々からは、「粟根文化圏」の人脈について知ることが出来たこと、井伏鱒二の祖父・民左衛門への、さらなる興味を持ったことなどが聞かれました。また、世良先生の熱意と地道な研究に感服したとの声もありました。

また、青木ゼミ生からは、「今回講演会に参加したことで、後期のフィールドワークに向けて、 大変勉強となりました。これから、改めて資料を読み返し、また教本をも用いて井伏鱒二のことを深めていきます。」とのコメントがありました。

私は、福山大学に赴任してすぐのころ、井伏生家に伺った際に、鱒二の甥にあたられる章典氏から伺ったお話を思い出します。氏は、藤原武夫先生の話をされ、先生は、お話の際に決してご自身の専門の話をされない、素晴らしいかただとのことでした。その時は腑に落ちなかったのですが、今は藤原氏の奥ゆかしい人間性に信頼を置く地域の価値観が分かる気がします。やはり、藤原先生は賢人とされていたと思います。